

第 5 章 淡水魚類

第5章 淡水魚類

1 調査概況

(1) 調査河川

厚東川は、中国山地の桂木山（標高720メートル）および鯨ヶ岳（標高616メートル）付近に端を発し、南流し宇部市を貫通して瀬戸内海に注ぐ、流路延長59.9キロメートル、流域面積399平方キロメートルの二級河川である。上流域に秋吉台および秋芳洞があるため、流れる水はカルシウム濃度が高いことでも有名である。本河川の瀬戸および下宇内付近から下流が宇部市にあたる。河口より約16キロメートル、標高約20メートルのところに昭和29年完成の厚東ダムがあり、湛水面積2.5平方キロメートル、総貯水量238万立方メートルの小野湖を形成している。大田川は厚東川のもっとも大きな支流で、宇部市には流程の下流域一部のみが含まれており、雑佐川と同じく小野ダム湖左岸に流れ込んでいる支流である。小野ダム湖より下流に流れ込む支流には、上流から、左岸に甲山川および善和川、右岸に大坪川および古川などがある。

真締川は、その源を宇部市川上の男山に発し、南流して宇部市街地を貫流、宇部港に注ぐ流路延長8.3キロメートル、流域面積20.4平方キロメートルの二級河川である。沢波川は、源を宇部市西岐波上請川地区の山間部に発し、南東部床波地域において瀬戸内海に注ぐ、流路延長4.9キロメートル、流域面積6.0平方キロメートルの二級河川である。江頭川は、宇部市西岐波波岡ノ辻地区の丘陵部に発し、南東部新浦地域において瀬戸内海に注ぐ、流路延長2.3キロメートル、流域面積2.3平方キロメートルの二級河川である。

(2) 調査地点および調査期間

調査地点を図1に示した。厚東川本流筋では9地点（図1、地点1～9）、支流では大田川3地点（地点10～12）、雑佐川1地点（地点13）、甲山川3地点（地点14～16）、善和川2地点（地点17、18）、大坪川1地点（地点19）および古川1地点（地点20）を調査した。真締川では7地点（地点21～27）、江頭川では4地点（地点28～31）、および沢波川では6地点（地点32～37）を調査した。厚東川支流の調査は平成14年8月に、真締川、沢波川および江頭川の調査は平成13年4～7月に行われたが、厚東川本流はそれ以前に著者のうちの藤岡が調査したものである。なお、希少淡水魚類保護の観点から、正確な地名は臥せる。

(3) 調査方法

調査に際しては、タモ網、投網、セルビンなどを現地の河川状況に適宜合わせて使い、生息する魚種をすべて確認できるように努力した。採集された魚類は、一部精査のため持ち帰ったものの他は、同定後放流した。

(4) 保全すべきものの選定基準

環境省（1999）のレッドリスト、および山口県（2002）の山口県版レッドデータブックに従った。

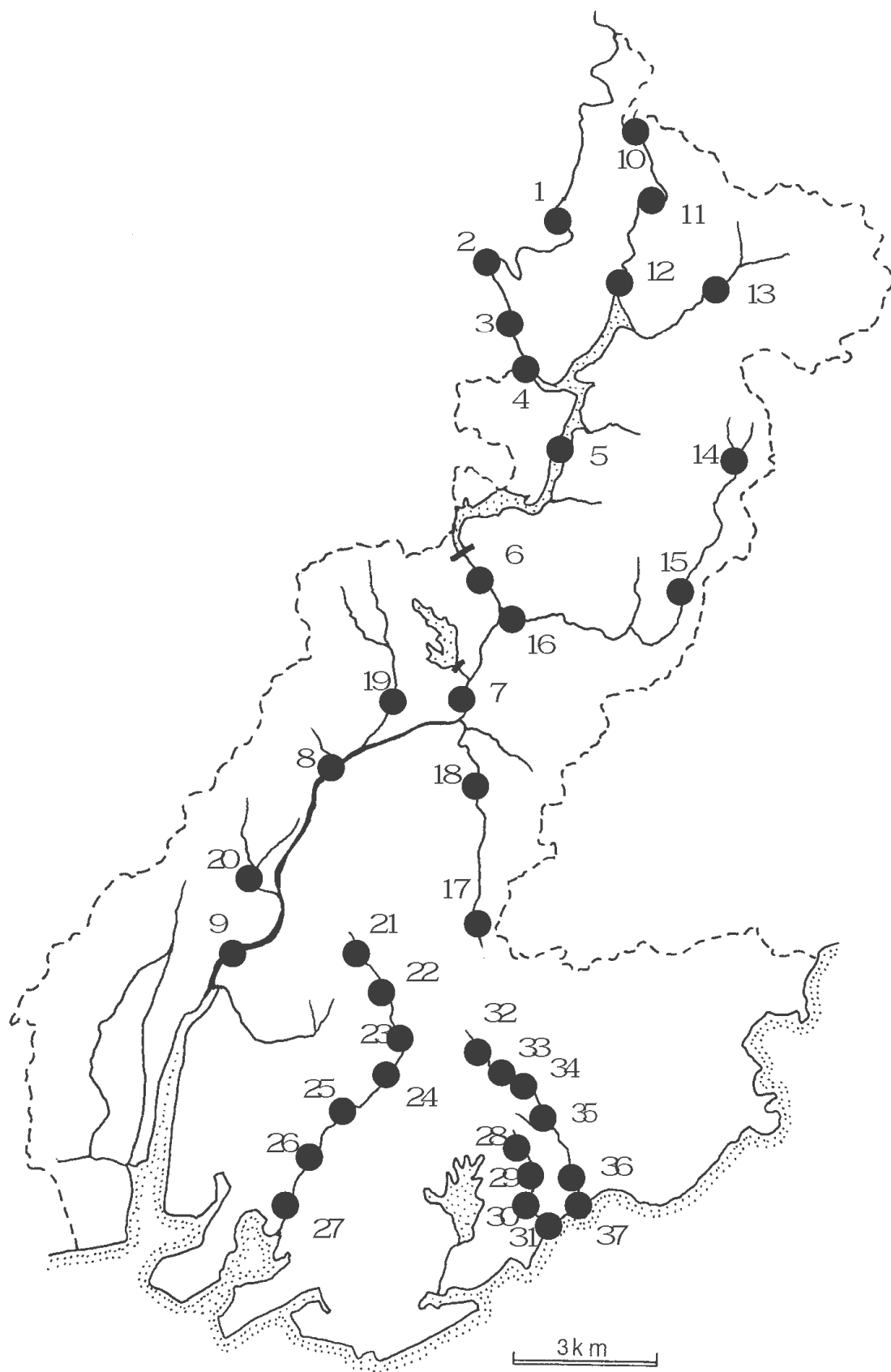


図1. 調査地点を示した宇部市全図。厚東川（地点1～20）、真締川（地点21～27）、江頭川（地点28～31）、および沢波川（地点32～37）。

2 淡水魚類の概況

厚東川の淡水魚類相は、既報の山口県に生息する淡水魚類（片山・藤岡、1971；藤岡・片山、1976；藤岡、1991）、特に西部に分布するものと同様である。山口県は、瀬戸内海西部に面する各県と魚類相の特徴が一致し、瀬戸内海東部に面する各県や北九州地区よりも若干魚類相が貧弱である。小野湖には、湛水以降増殖目的で特に琵琶湖から多くの魚類が移殖され（藤岡、1969）、加えてそれにとまなう混入によって生息するようになったと考えられる魚類も多い。

真締川は市街地を流れる河川の割に多くの種が生息している。沢波川、および江頭川は、規模が小さいこともあり、淡水魚類相は貧弱であるが、河口付近には多くの汽水性魚類が侵入する。

3 調査結果

厚東川の調査結果を、本流について表1、支流について表2、真締川、沢波川および江頭川について表3に示した。このたびの調査で、26科74種が確認された。そのうち約30種が主に汽水域を生息場所とする魚類であるため、宇部市には約44種の純淡水魚が生息していることになる。また、そのうち6種が外国からの、さらに6種が他県からの移殖移入種である。したがって、宇部市に原産する純淡水魚類は、わずか32種あまりということになる。その他、漁業協同組合等の団体によって、毎年ウナギ、コイ、フナ類、アユ等の放流事業が行われているため、それらの魚類については必ずしも自生の血統が残っているとは限らない。

(1) 厚東川本流

小野湖を除く厚東川本流域からは、64種の魚類が確認されたが、そのうちニシン科、サヨリ科、ボラ科、ヨウジウオ科、コチ科、スズキ科、ヒイラギ科、タイ科、シマイサキ科、カレイ科およびフグ科の全17種とハゼ科の10種、合わせて27種は、感潮域である地点9からのみ採集された汽水性または回遊性の魚類である。それらを除いた魚類37種が、その他の地点にほぼ共通した魚類相を代表するものと考えられる。小野湖からは28種の魚類が確認されたが、それは上記の移殖移入魚によって特徴づけられるほか、スナヤツメ、ヤリタナゴ、アブラボテ、タカハヤ、オヤニラミ、カワヨシノボリなど通常流水に生息する魚類を欠いていることも一つの特徴である。さらに近年閘放流と在来魚の食害で問題となっているオオクチバス（ブラックバス）やブルーギルが多数生息し、魚類相に変化をもたらしつつある。

(2) 厚東川支流

支流大田川においては、19種が採集されたが、この地点は、小野ダム湖から比較的近いこと、ダム湖に移殖されたソウギョやブルーギルも採集され、オオクチバスも目撃された。雑佐川では、6種が採集されたのみであった。甲山川からは、21種が確認されたが、その多くは本流流入口近くで採集されたもので、その地点は本流の魚類相多様性の影響を受けているものと考えられる。善和川では9種、大坪川では15種が採集された。古川では、19種の魚類が採集されたが、純淡水魚の他、スズキやボラ、アシシロハゼなど、汽水性の魚類も出現し、本流感潮域の影響を強く受けているものと考えられる。

(3) 真締川

河川規模が小さいにもかかわらず、41種もの魚類が確認された。感潮域の魚類相

表 1. 厚東川本流の出現魚種

採集地点番号 (St. No.)	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ヤツメウナギ目									
ヤツメウナギ科									
スナヤツメ	○	○					○		
ウナギ目									
ウナギ科									
ウナギ	○				○		○		
ニシン目									
ニシン科									
サツパ									○
コノシロ									○
コイ目									
コイ科									
コイ				○	○			○	○
ゲンゴロウブナ				○	○				
ギンブナ	○			○	○	○		○	
フナ類									
ヤリタナゴ						○			
アブラボテ	○					○		○	
タイリクバラタナゴ					○				
ワタカ	○	○		○	○	○		○	○
オイカワ	○	○			○	○		○	
カワムツ	○	○		○	○	○		○	
ソウギョ				○	○				
ハクレン					○				
ウグイ				○	○			○	○
タカハヤ	○			○					
タモロコ		○		○	○				
ビワヒガイ				○					
ムギツク	○	○			○	○	○	○	
ズナガニゴイ	○	○	○		○	○		○	
ニゴイ								○	
イトモロコ		○	○		○	○		○	
カマツカ	○	○	○		○	○		○	
ゼゼラ					○				
ドジョウ科									
ドジョウ			○		○	○	○	○	
ヤマトシマドジョウ	○	○		○	○		○	○	
ナマズ目									
ナマズ科									
ナマズ					○		○	○	
ギギ科									
ギギ	○	○		○	○	○	○	○	
アカザ科									
アカザ	○								
サケ目									
キュウリウオ科									
ワカサギ					○			○	
アユ科									
アユ	○			○	○	○	○	○	
ダツ目									
メダカ科									
メダカ	○						○	○	○
サヨリ科									
クルマサヨリ									○
サヨリ									○
ボラ目									
ボラ科									
ボラ									○
セスジボラ									○
メナダ									○

表 1. 続き

採集地点番号 (St. No.)	1	2	3	4	5	6	7	8	9
トゲウオ目									
ヨウジウオ科									
ヨウジウオ									○
カサゴ目									
コチ科									
マゴチ									○
スズキ目									
タイワンドジョウ科									
カムルチー									
ケツギョ科									
オヤニラミ						○			
スズキ科									
スズキ									○
サンフィッシュ科									
オオクチバス				○	○			○	
ブルーギル		○			○	○			
ヒイラギ科									
ヒイラギ									○
タイ科									
キチヌ									○
クロダイ									○
シマイサキ科									
コトヒキ									○
シマイサキ									○
ドンコ科									
ドンコ	○	○		○	○	○	○	○	
ハゼ科									
マハゼ									○
アシシロハゼ									
マサゴハゼ									
ヒメハゼ									○
アベハゼ									○
ビリンゴ									○
ウロハゼ									○
ゴクラクハゼ									○
カワヨシノボリ	○	○		○		○		○	
シマヨシノボリ						○	○	○	
オオヨシノボリ									
トウヨシノボリ	○	○			○	○		○	
ヨシノボリ類									
アカオビシマハゼ									○
シモフリシマハゼ									○
チチブ								○	○
ヌマチチブ	○	○			○	○		○	○
ヒモハゼ									
ウキゴリ									
ミミズハゼ									
シロウオ									○
トビハゼ									○
カレイ目									
カレイ科									
イシガレイ									○
フグ目									
フグ科									
クサフグ									○

表 2. 厚東川支流の出現魚種

採集地点番号 (St. No.)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ヤツメウナギ目											
ヤツメウナギ科											
スナヤツメ											
ウナギ目											
ウナギ科											
ウナギ											○
ニシン目											
ニシン科											
サツパ											
コノシロ											
コイ目											
コイ科											
コイ	○	○					○			○	○
ゲンゴロウブナ	○										
ギンブナ				○		○	○	○		○	○
フナ類											
ヤリタナゴ											○
アブラボテ	○						○			○	○
タイリクバラタナゴ											
ワタカ	○	○									
オイカワ		○	○				○		○	○	○
カワムツ			○	○	○	○	○	○	○	○	○
ソウギョ			○								
ハクレン											
ウグイ											
タカハヤ											
タモロコ		○									
ビワヒガイ											
ムギツク		○	○	○	○	○	○		○	○	
ズナガニゴイ		○									
ニゴイ											
イトモロコ		○				○				○	○
カマツカ		○				○	○		○	○	○
ゼゼラ											
ドジョウ科											
ドジョウ				○	○	○				○	
ヤマトシマドジョウ		○							○	○	○
ナマズ目											
ナマズ科											
ナマズ			○				○				○
ギギ科											
ギギ		○					○				○
アカザ科											
アカザ							○				
サケ目											
キュウリウオ科											
ワカサギ											
アユ科											
アユ							○			○	
ダツ目											
メダカ科											
メダカ					○					○	○
サヨリ科											
クルマサヨリ											
サヨリ											
ボラ目											
ボラ科											
ボラ											○
セスジボラ											
メナダ											

表 2. 続き

採集地点番号 (St. No.)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
トゲウオ目											
ヨウジウオ科											
ヨウジウオ											
カサゴ目											
コチ科											
マゴチ											
スズキ目											
タイワンドジョウ科											
カムルチー											
ケツギョ科											
オヤニラミ							○				
スズキ科											
スズキ											○
サンフィッシュ科											
オオクチバス											
ブルーギル		○									
ヒイラギ科											
ヒイラギ											
タイ科											
キチヌ											
クロダイ											
シマイサキ科											
コトヒキ											
シマイサキ											
ドンコ科											
ドンコ				○	○	○	○	○	○	○	
ハゼ科											
マハゼ											
アシシロハゼ											○
マサゴハゼ											
ヒメハゼ											
アベハゼ											
ビリンゴ											
ウロハゼ											
ゴクラクハゼ											
カワヨシノボリ		○	○	○		○	○		○	○	
シマヨシノボリ							○				
オオヨシノボリ							○				
トウヨシノボリ		○					○		○	○	○
ヨシノボリ類											
アカオビシマハゼ											
シモフリシマハゼ											
チチブ											
ヌマチチブ		○					○				○
ヒモハゼ											
ウキゴリ											○
ミミズハゼ											
シロウオ											
トビハゼ											
カレイ目											
カレイ科											
イシガレイ											
フグ目											
フグ科											
クサフグ											

表 3. 真綿川、江頭川および沢波川の出現魚種

採集地点番号 (St. No.)	真綿川							江頭川				沢波川					
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
ヤツメウナギ目																	
ヤツメウナギ科																	
スナヤツメ																	
ウナギ目																	
ウナギ科																	
ウナギ					○	○											○
ニシン目																	
ニシン科																	
サッパ																	
コノシロ							○										
コイ目																	
コイ科																	
コイ				○	○	○											
ゲンゴロウブナ					○												
ギンブナ					○	○	○										
フナ類					○	○						○	○	○			
ヤリタナゴ					○	○											
アブラボテ				○	○												
タイリクバラタナゴ					○												
ワタカ																	
オイカワ				○	○	○							○	○			
カワムツ	○	○	○	○								○	○				
ソウギョ																	
ハクレン																	
ウグイ																○	
タカハヤ		○	○	○	○												
タモロコ				○													
ビワヒガイ																	
ムギツク																	
ズナガニゴイ																	
ニゴイ																	
イトモロコ																	
カマツカ				○	○												
ゼゼラ																	
ドジョウ科																	
ドジョウ												○		○	○		
ヤマトシマドジョウ																	
ナマズ目																	
ナマズ科																	
ナマズ				○	○												
ギギ科																	
ギギ																	
アカザ科																	
アカザ																	
サケ目																	
キュウリウオ科																	
ワカサギ																	
アユ科																	
アユ					○												
ダツ目																	
メダカ科																	
メダカ				○	○	○	○										
サヨリ科																	
クルマサヨリ																	
サヨリ																	
ボラ目																	
ボラ科																	
ボラ						○	○			○						○	○
セスジボラ																	
メナダ							○										

表 3. 続き

採集地点番号 (St. No.)	真綿川							江頭川				沢波川					
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
トゲウオ目																	
ヨウジウオ科																	
ヨウジウオ																	
カサゴ目																	
コチ科																	
マゴチ											○						
スズキ目																	
タイワンドジョウ科																	
カムルチー				○													
ケツギョ科																	
オヤニラミ																	
スズキ科																	
スズキ					○	○	○				○					○	○
サンフィッシュ科																	
オオクチバス															○		
ブルーギル				○	○	○											
ヒイラギ科																	
ヒイラギ																	○
タイ科																	
キチヌ																	
クロダイ						○	○									○	
シマイサキ科																	
コトヒキ																	
シマイサキ																	
ドンコ科																	
ドンコ	○	○	○	○											○		
ハゼ科																	
マハゼ							○				○					○	○
アシシロハゼ						○	○									○	○
マサゴハゼ						○	○										
ヒメハゼ							○										
アベハゼ						○	○									○	
ビリンゴ						○	○										
ウロハゼ						○	○										
ゴクラクハゼ					○												
カワヨシノボリ	○	○	○														
シマヨシノボリ					○	○		○	○								
オオヨシノボリ																	
トウヨシノボリ		○	○		○	○											
ヨシノボリ類					○	○									○	○	
アカオビシマハゼ																	○
シモフリシマハゼ							○										
チチブ						○	○									○	
ヌマチチブ								○	○	○	○						
ヒモハゼ						○	○				○						
ウキゴリ																	
ミミズハゼ						○	○				○						
シロウオ																	
トビハゼ						○	○				○						
カレイ目																	
カレイ科																	
イシガレイ											○						
フグ目																	
フグ科																	
クサフグ							○										○

(地点26、27)が厚東川のそれにまさるとも劣らないばかりでなく、中上流においても、市街地を流れる河川の割にコイ科魚類などが多く、特に在来タナゴ2種が出現したことは、これら魚類が産卵床とするマツカサガイなどのイシガイ科二枚貝が生息していることを示すもので、本河川が都市河川であるにもかかわらず比較的生物の多様性が高いことを示していると考えられる。

(4) 江頭川

江頭川では、わずか10種の魚類が確認されたにすぎなかった。もっとも河川規模が小さかったこともあり、純淡水魚は全く採集されなかった。本河川には、海から侵入した魚類しか生息していないものと考えられる。

(5) 沢波川

確認された魚種は20種と少なかったが、汽水性の魚類ばかりではなくカワムツやドジョウなど里山環境に出現する魚類も少ないながら生息していた。ただし、外来魚として問題となっているオオクチバスも採集され、闊放流の蔓延をうかがわせるものである。

4 魚種の解説

(1) スナヤツメ *Lethenteron reissneri* (Dybowski)

地方名：ヤツメウナギ、ヤツメ、メクラウナギ、カゲース、スナハマリ、スナヤツメ。

口は丸い吸盤状をなし、目の後ろに7つの鰓孔がある。幼期(アンモシーテス幼生)は眼は皮下に埋没しており、砂中で数年デトリタスを食べて生活し、その後、秋から冬にかけて変態し成体になる。産卵期は4～5月で砂礫底に窪みを作って数尾で産卵し、産卵後は死滅する。全長は15cm前後になる。日本全土に広く分布するが、山口県のものは南方種に分類される(Yamazaki and Goto, 1996, 1997)。県内各河川に生息していたが農薬や河川改修により生息場を失い減少傾向にある。産卵期以外は砂中生活をしているため発見はしにくい。食用にしない在来種。

(2) ウナギ *Anguilla japonica* Temminck et Schlegel (図版I, A)

地方名：カニクイ、ゴマウナギ、ウナギ。

体は細長く、腹びれはなく、鱗は皮膚に埋没する。産卵はフィリピン東方沖約1,000キロメートルの海で6月に行われると考えられている。仔魚は柳の葉に似た葉形幼生(レプトセファルス)となって黒潮に乗って北上し、冬から初春にシラスウナギとなって川を溯上する。河川で6年から10年を過ごし、成体になると河川を下って(クダリウナギ)産卵場に向かう。日本全土に分布するが東北以北には少ない。蒲焼にして美味である在来種。

(3) サッパ *Sardinella zunasi* (Bleeker)

地方名：ワチ、ヒラゴ、サッパ。

体は側扁し、背部は青緑色で、腹部は白色を呈し硬い稜鱗がある。コノシロに似るが背びれの末端軟条が長く伸びないので区別される。日本全土に分布する海産魚であるが、県内主要河川の河口域に侵入し、食用にされる在来種。

(4) コノシロ *Konosirus punctatus* (Temminck et Schlegel)

地方名：ワチ、ツナシ、アチ、コノシロウ。

体は側扁し鱗は円鱗で側線はなく、体側に数本の縦列斑があり、肩部に1暗色斑が

ある。本州（松島湾以南、津軽半島以南）、四国および九州に分布する海産魚であるが、県内河川の河口域に侵入し、食用にされる在来種。

(5) コイ *Cyprinus carpio* Linnaeus

地方名：コイ、マゴイ。

口ひげは4本で臀びれは6軟条、背びれと臀びれの一番前の鰭条は骨化して硬い。産卵期は5～6月（山口県）で1尾の雌に数尾の雄が追尾し、水草などの茎に卵を産み付ける。食性は雑食性である。日本全土に分布し県内各河川湖沼に生息する在来種。食用や観賞鯉として盛んに養殖されている。国外ではアジア・ヨーロッパに広く分布する。

(6) ゲンゴロウブナ *Carassius cuvieri* Temminck et Schlegel

地方名：ゲンゴロウ、ヘラブナ、フナ、ゲンゴロウブナ。

口ひげはなく、体高が著しく高く、鰓にある鰓耙が非常に多く(106～120)、植物性プランクトンを主食とする。産卵期は5～6月（山口県）で水草の茎などに産卵する。自然分布はびわ湖淀川水系特産魚であるが、各地に移殖放流され県内の各河川やダム湖などに生息する。厚東川水系の小野湖には30cmを越える大物が多く、釣りの対象にされている。県内各河川に放流され分布を拡大し、ほとんどの河川で見られる。食用にされる移殖種。

(7) ギンブナ *Carassius auratus langsdorfii* Temminck et Schlegel

地方名：フナ、マブナ。

口ひげはなく、食性は雑食性。産卵期は5～6月（山口県）で水草の茎などに産卵する。地方により雄魚が著しく少なく、雌は三倍体であることが多い。三倍体で雌性発生をするもののみギンブナと呼ぶこともある。日本全土に分布し県内ほとんどの河川に生息する。食用にされ冬は特に美味である在来種。

(8) ヤリタナゴ *Tanakia lanceolata* (Temminck et Shlegel) (図版I, D)

地方名：アカネ、タナゴ、ボテ。

背びれの鰭条に平行した数個の紡錘形の黒斑があり、背びれの外縁はほぼ直線を成す。口部に短いヒゲが2本ある。産卵期は4～5月頃（山口県）でこの時期の雄は美しい婚姻色をあらわし、雌は産卵管を伸ばし二枚貝（マツカサガイなど）の鰓に卵を産み付ける。北海道と南九州を除く日本各地に分布している。山口県では日本海側に流れる深川川、瀬戸内海側に流れる木屋川、厚狭川、厚東川で生息を確認したが、槇野川以東の河川では見られない。食用にしない在来種。

(9) アブラボテ *Tanakia limbata* (Temminck et Schlegel) (図版I, E)

地方名：ニガブナ、タナゴ、センピン、ニゴズ、ボテ、イシブナ。

口ひげは2本でその長さは眼径にほぼ等しく、体高は比較的高い。雄は体側に婚姻色をあらわし、口先は白く見える。雌は産卵管をもち二枚貝（マツカサガイなど）の鰓に産卵する。産卵期は5～6月（山口県）である。濃尾平野以西の本州、四国の瀬戸内海側および九州の北部に分布し、県内ではほとんどの河川に生息する。食用にしない在来種。

(10) タイリクバラタナゴ *Rhodeus ocellatus ocellatus* (Kner)

地方名：タナゴ、バラタナゴ。

体は側扁し体高はやや高く、口ひげはない。側線は不完全で前部に2～7枚の有孔鱗が見られ、雄の腹びれの前端は白く光る。産卵期は5～8月（山口県）で、この時

期の雄はレンガ色に近い婚姻色をあらわし、雌は産卵管が伸び二枚貝（ドブガイなど）の鰓に産卵する。アジア大陸東部と台湾の原産。日本へは 1940 年代に中国からソウギョやハクレンの種苗に混入して侵入し、1945 年頃に利根川で発見された。霞ヶ浦（利根川水系）からはイケチョウガイについてびわ湖に侵入し、びわ湖からは放流稚アユについて全国に分布を拡大した。食用にしない移入種。

(11) ワタカ *Ischikauia steenackeri* (Sauvage)

地方名：ワダカ、イダ、ワタカ。

口は上向きで、腹びれから肛門にかけて隆起縁をなす。産卵期は 6～7 月である。イネ科の植物をよく食べる。自然分布はびわ湖淀川水系で各地に放流され分布を拡大している。1950 年代に山口県に移殖、繁殖し分布を広げている。食用にするが美味ではない移殖種。

(12) オイカワ *Zacco platypus* (Temminck et Schlegel)

地方名：ハエ、アカマツバエ、アカマツ、セバエ、セバヤ、ハエノミズ、バカバエ、シラハヤ、ヤナギバエ、サンジバエ、アカバエ、ツバメバイ、アカマツバヤ、センジョウバエ、ヤナギバヤ、クサバヤ、センキョウバエ、ハイ、アカ、ジバエ、ゲンダバエ。

口は直線的で、体側にやや不明瞭な幅広い数条の横帯がある。産卵期は 5～6 月（山口県）で雄は青赤色の婚姻色をあらわす。自然分布は関東以西の本州、四国の瀬戸内海側および九州北部で、県内ではほとんどの河川に生息し、中流域に多い。主要水系ではハヤ釣りの対象として県外からの釣り客が多い。食用にされる在来種。

(13) カワムツ *Zacco temmincki* (Temminck et Schlegel)

地方名：ハエ、ハヤ、ヤナギバエ、ツバクロバエ、アカマツバエ、ノロバエ、バカバエ、ケンバエ、ヤマバエ、アカマツ、ヤマンバエ、ゲンダバヤ、アカムツ、ハエンコウ、フチバエ、スジバエ、ヤマソ、アカムツバヤ、ホンバヤ、センギョバヤ、ウズバエ。

体側に 1 本の黒色縦帯があり、側線鱗数は 51 以下で臀びれ軟条数は 10 である。産卵期は 6～7 月（山口県）でこの時期の雄は赤褐色の婚姻色をあらわす。中部地方以西の本州、四国および九州に分布し、県内ではほとんどの河川の中上流域に生息する。食用にされ冬は特に美味しい在来種。

(14) ソウギョ *Ctenopharyngodon idellus* (Valenciennes)

地方名：ソウギョ。

背面から見た頭部前端は丸みを帯び、成長すると 1 m 以上に達する。産卵期は 6～7 月である。中国原産で日本へは 1978 年頃から輸入された記録がある。県内では平瀬の回復（オオカナダモの駆除）のため利根川から移殖されたが繁殖はしていない。食用にされる移殖種。

(15) ハクレン *Hypophthalmichthys moritrix* (Valenciennes)

眼は頭の中央より下方にかたより、体側は銀白色をなし、頭の下部から肛門に至る腹面がキール状の隆起縁をなす。産卵期は 6～7 月で、成長すると 1 m に達する。中国大陸原産で日本へは 1878 年頃からの移殖記録がある。小野湖と、瀬戸内海に流入する末武川上流にある温見ダムでとれた記録もある。量的に少ないのであまり食用にされない。中国大陸・台湾では重要な食用魚。移殖種。

(16) ウグイ *Tribolodon hakonensis* (Günther)

地方名：イダ、サクライダ、ネコマタギ、ユダ、ウグイ。

上顎と下顎はほぼ同長か上顎がやや長く、産卵期の追星は顕著で、婚姻色は赤色縦帯が体側に3本出現する。日本全土に分布し、降海型と淡水型があるがこの区別は困難。県内ではほとんどの河川に生息しており、3～5月頃（山口県）が産卵期で、瀬に大群が集まり産卵行動が見られる。山口県では食用にされない在来種。

(17) タカハヤ *Rhynchocypris oxycephalus* (Jordan et Snyder)

地方名：ドロバエ、ドロクラ、ドロンバエ、ドロ、ドロンボ、クソバエ、アブラ、ハマゴリ、ドロクロ、ドロバヤ、ヤマンバエ。

鱗は小さく尾柄高は高く、頭長の50%以上に及ぶ。産卵期は5～6月（山口県）である。本州中部以西、四国および九州に分布する。県内では各河川の上流域に生息する。食用にしない在来種。

(18) タモロコ *Gnathopogon elongatus* (Temminck et Schlegel)

地方名：モロコ、ハエ、ジャコ。

肛門は臀びれの直前にあり、体は太く短く口ひげは長くほぼ眼径に等しい。産卵期は5～6月（山口県）である。関東以西の本州と四国に分布し、東北地方や九州の一部に移殖されている。県内では瀬戸内海に流入する河川から多数採集されているが、在来種であるのか、他県から移入されたものか曖昧である。小野湖では、琵琶湖から移殖されたホンモロコと交雑している。

(19) ビワヒガイ *Sarcocheilichthys variegatus microoculus* Mori

地方名：ヒガイ。

尾柄高は頭長の49%以下でびわ湖特産魚である。東北地方、関東平野、北陸地方、諏訪湖および高知県などに移殖されている。1951年に佐波川水系島地で2尾採集されているが、その後もびわ湖からの放流稚アユについて侵入し、錦川、樫野川、厚東川と分布は拡大されている。量的には少なく食用にしない移入種。

(20) ムギツク *Pungtungia herzi* Herzenstein (図版 I, B)

地方名：ニナスイ、イワツツキ、ムギツツキ、ユダヤ、キンコウスイ、クチコマ、オツボ、クチボソ、ムギ、ムギツコ、ミナスイ。

口ひげは2本で口は小さく、体側を黒色縦帯が走る。産卵期は5～6月（山口県）で岩の割れ目などに産卵する。福井県・岐阜県・三重県以西の本州、四国北東部および九州北部に分布し、県内ほとんどの河川に多数生息し、岩場を好む。オヤニラミやドンコの巣に托卵することによって有名。骨が硬く食用にしない在来種。

(21) ズナガニゴイ *Hemibarbus longirostris* (Regan) (図版 I, C)

地方名：ハウセンボウ、スナフキ、カワキス、キスゴ、カワイナ、ツチフキ、ウキハウセン、イナ。

肛門は臀びれの直前にあり、体側にゴマ状の黒点が多数縦列する。産卵期は5～6月（山口県）である。近畿地方以西の本州に分布し、山陰や静岡県河川の河川に移殖されている。県内の主要河川のほとんどの河川に生息しているが水系により量的な差は大きい。食用にはあまりされないが、カラ揚げにすると美味である在来種。

(22) ニゴイ *Hemibarbus barbus* (Temminck et Schlegel)

地方名：ニゴイ。

肛門は臀びれの直前にあり、鱗には斑紋はなく、全長は30cm以上に達する。産卵期は5～6月である。中部地方以北の本州と錦川以西の山口県および九州に不連続的

に分布する。移入種という考えもあるが、九州および四国西部にも分布するため、在来種の可能性は高い。

(23) イトモロコ *Squalidus grasilis grasilis* (Temminck et Schlegel)

地方名：ソコバエ、キンキョロ、ドロンバエ、ドロバエ、チョウチンバエ、ソコンバエ、モロコ、ゴマンバエ、ドロコ、ムギバエ。

肛門は臀びれよりやや前方にあり、側線鱗は他の鱗より幅が広く外縁は側扁しその中央はくぼむ。産卵期は5～6月（山口県）である。濃尾平野以西の本州、四国北東部および九州北部に分布し、県内河川のほとんどのに生息する。食用にしない在来種。

(24) カマツカ *Pseudogobio esocinus esocinus* (Temminck et Schlegel)

地方名：スナフキ、ホーセンボウ、フエッコ、ツチフキ、スナハミ、ホーセン、カマスカ。

肛門は臀びれと腹びれの中央よりも前にあり、唇は幅が広く口ひげは2本ある。産卵期は5～6月（山口県）である。岩手県・山形県以南の本州、四国および九州に分布し、県内では各河川の砂礫底に多く生息する。食用にはあまりされないが、カラ揚げにすると美味である在来種。

(25) ゼゼラ *Biwia zezera* (Ishikawa)

頭部は円く、口は先端にあって小さい。産卵期（4～6月）には雄は黒色となる。砂または砂泥底にすむ。日本特産で琵琶湖淀川水系のみから知られていたが、各地に移入している。小野湖のものも移植されたものである。

(26) ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor) (図版Ⅰ, F)

地方名：ドンジョウ、ドジョウ。

眼下部に棘がなく、体は細長く、側線は完全、口ひげは10本で尾びれの後縁は外湾する。産卵期は5～6月（山口県）である。日本全土に分布し、県内では各河川や水田に生息していたが、農薬や灌漑水路の改修（U字溝）の影響を受け、減少傾向にある。二倍体のほか、三倍体や四倍体も知られている。食用にする在来種。

(27) ヤマトシマドジョウ *Cobitis matsubarae* Okada et Ikeda

地方名：スナドジョウ、シマドジョウ。

体は細長く尾びれの後縁は直線で側線は不完全、体側の暗色斑は点列型で背びれ軟条数は8軟条、雄の胸びれ基部の骨質盤は丸く、産卵期は5～6月（山口県）である。九州と山口県に分布し、県内では島田川、阿武川より以西に分布する。異質四倍体性で、シマドジョウとスジシマドジョウを両親種とするらしい。食用にしない在来種。

(28) ナマズ *Silurus asotus* Linnaeus (図版、Ⅱ, A)

地方名：ナマズ。

背びれは前方にあって、臀びれは長く、後端は尾びれに接近している。眼はやや背面にあり、腹面からは見えない。口ひげは上顎に一对、下顎に一对、計二対である。産卵期は5～6月（山口県）である。日本全土に分布し、県内の各河川に生息する。食用（蒲焼）にされる在来種。

(29) ギギ *Pelteobagrus nudiceps* (Sauvege)

地方名：ギギユウ、ギギタ、ギンチョウ、ヤッコ、ギギ。

背びれと胸びれに1本の毒棘があり、尾びれ後縁は深く2又する。眼は大きい。産卵期は6～7月（山口県）である。中部以西の本州、四国の吉野川および九州北東部に分布し、県内では各河川に生息する。食用（蒲焼）にされる所もある在来種。

(30) アカザ *Liobagrus reini* Hilgendorf (図版Ⅱ, B)

地方名：アカデン、オコゼ、アカナマズ、ギンチョウ、オコザ、ギギユウ、ギギタオコデ、センギリ、ギギ。

側線は不完全で胸びれ上部のみにある。背びれと胸びれに1本の棘があり、これに刺されると疼痛を感じる。脂鰭の基底は長い。体色は赤褐色。産卵期は5～6月（山口県）である。宮城県、秋田県以南の本州、四国および九州に分布し、県内では河川の上流域に生息するが、最近生息場の壊失と水質悪化の影響を受け減少の傾向にある。食用にされない在来種。

(31) ワカサギ *Hypomesus transpacificus nipponensis* McAllister

地方名：ワカサギ。

口は小さく上顎骨の後端は瞳孔の中心より前方下にある。縦列鱗数は60以下、吻長は两眼間隔よりも長い。産卵期は1～2月頃である。北海道、東京都および島根県以北の本州に分布し、県内では人工湖（ダム）に産卵放流され、自然繁殖しているところも多い。小野湖や豊田湖のワカサギ釣りは有名で県外からの釣り客が多い。食用にされ美味である移殖種。

(32) アユ *Plecoglossus altivelis altivelis* Temminck et Schlegel (図版Ⅱ, C)

地方名：アイ、アイゴ、アユ。

背びれ軟条数は10～11、臀びれ軟条数は14～15、側線鱗数は67～68。産卵期は9月下旬から11月上旬（山口県）で感潮域上限付近の砂礫底に産卵し、産卵後は死滅する。北海道西部以南から南九州まで分布し、河川漁業で最も重要な魚種である。県内各河川では天然溯上が見られるが、河川により溯上量の差は大きい。主要河川は放流が義務付けられている。食用にする在来種。

(33) メダカ *Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel) (図版Ⅱ, D)

地方名：メータンゴ、メータンゴウ、メンタ、メダコ、メイタン、メダカ。

口は小さく側線はない。雄の背びれ外縁に欠刻があるが、雌にはない。産卵は4月から10月上旬まで（山口県）続く。本州、四国および九州の止水域か流れの緩い小川に生息する。県内に広く分布していたが、近年農薬や生息場所の壊失により極度に減少した。在来種。

(34) クルメサヨリ *Hyporhamphus intermedius* Cantor

地方名：サヨリ。

下顎は頭長より長く、その下面は黒色で、背びれ前方鱗数は48～63でサヨリよりは少ない。産卵期は6～7月で河口付近の水草に産卵する。青森県から有明海に至る本州および九州に分布する。県内では瀬戸内海側に流入する河川の河口に侵入する。食用にされる在来種。

(35) サヨリ *Hyporhamphus sajori* (Temminck et Schlegel)

地方名：サイレン、ヨドロ、スズ、サイリョウ、サイロリン、サヨリ。

日本各地の沿岸で最も普通に見られる種で、下顎は頭長より短くその下面は朱赤色で、背びれ前方鱗数は66～81でクルメサヨリよりは多い。産卵期は5～6月である。琉球列島と小笠原諸島を除く日本に分布し、県内各河川の河口部に侵入し、全長は40cmに達するものもある。食用にされる在来種。

(36) ボラ *Mugil cephalus cephalus* Linnaeus

地方名：イナ、トド、ボラ。

背びれは2基あり、臀びれは3棘8軟条。目には発達した脂腺がある。体長は55cm以上に達する。北海道以南の日本全土に分布する海魚であるが、幼期に河口に侵入し純淡水域にも侵入することがある。県内ほとんどの河口域で見られる。卵巣はカラスミの原料。食用にされる在来種。

(37) セスジボラ *Chelon affinis* (Günther)

地方名：ボラ。

背中線は隆起縁を形成する。目の脂腺は弱い。体長は30cmまで成長する。日本全土に分布する海魚であるが河口に侵入する。瀬戸内海側に流入する河川の河口域で良く見られる。食用にされる在来種。

(38) メナダ *Chelon haematocheilus* (Temminck et Schlegel)

地方名：アシノメ、メアカ、ドウナイ、シクチ、ヒクチ、オボコ。

体側中央の鱗は弱い櫛鱗を形成する。縦列鱗数は35〜43。成魚の目の脂腺は未発達。体長は60cm以上に達し、産卵期は秋である。北海道から九州にかけて分布する海産魚であるが、河口に侵入する。県内では瀬戸内海側に多く、食用にされる在来種。

(39) ヨウジウオ *Syngnathus schlegeli* Kaup

地方名：ナガイオ、ウミタツ。

鰐蓋骨の隆起線は未発達である。最も普通種で内湾のアマモ帯に多い。琉球列島を除く日本各地に分布し、河口の汽水域に侵入する。全長は通常20cmであるが、30cmに達するものもある。食用にしない在来種。

(40) マゴチ *Olatycephalus* sp. 2

地方名：アブラゴチ、サラサゴチ、スゴチ、オンゴチ、コチ。

体は縦扁し、眼は小さく下顎先端は丸い。5〜6月接岸して産卵（山口県）する。全長は1mに達し、南日本に広く分布する沿岸魚であるが、上げ潮について河口に侵入する（全長20〜30cmまで）。食用にされ美味で旬は夏である。在来種。

(41) カムルチー *Channa argus* (Cantor)

背びれは45〜54軟条、臀びれは31〜35軟条。産卵期は6〜7月である。原産地はアムール川から長江までの中国北中部および朝鮮半島で、日本へは朝鮮半島から移殖された。県内では1990年頃から見られるようになった。食用となる。移入種。

(42) オヤニラミ *Coreoperca kawamebari* (Temminck et Schlegel) (図版Ⅱ, F)

地方名：ニラミ、ネラミ、ネラン、ネランドウ、ヨツメ、カワメバル、ヤブネラミ。

側線鱗は42以下、臀びれ第2棘は短く、鰐蓋後端に眼径に等しい暗青色の斑紋がある。産卵期は5〜6月（山口県）で、水草の茎や沈んだ枯木に産み付けた卵を雄が保護する。本州西部（山陽では淀川支流保津川以西、山陰では由良川上流の音無川以西）四国（香川県の一部）および九州北部に分布し、県内では各河川の中流域で多く見られる。食用にされない在来種。

(43) スズキ *Lateolabrax japonicus* (Cuvier) (図版Ⅱ, E)

地方名：セイゴ、ハネ、スズキ。

下顎の腹面に鱗がなく、背びれ軟条数は12〜14。産卵期は11〜12月（山口県）である。日本各地に広く分布する海産魚であるが、幼期河口に侵入する。食用にするが海でとれる体長30cm以上のものは美味である。在来種。

(44) オオクチバス *Micropterus salmoides* (Lacepede)

地方名：ブラックバス、バス。

口は大きく、体側に黒色縦帯があり、側線鱗数は 60～68。北米原産で日本には 1925 年に移殖された。1980 年代に北九州から山口県(厚東川水系丸山ダム)に持ち込まれ、1992 年頃から急激に県内に分布を広げ、今ではほとんどの河川湖沼に生息している。産卵期は 5～7 月である。ルーア釣りの熱狂的なファンが多く、そのためあちこちに放流され広がっている。釣り上げても食用にする人は少ない。しかし、本種はアミノ酸であるタウリン(老化防止)を多量に含んでおり、食べ方によっては美味である。オオクチバスは魚食魚で在来魚に多大な被害を与えるので、今後県内の魚類相に変化が生じることが危惧される。移入種。

- (45) ブルーギル *Lepomis macrochirus macrochirus* Rafinesque (図版Ⅱ, G)
地方名: ブルーギル。

口は小さく鰓蓋後部に青黒色の斑紋があり、側線鱗数は 40～44。産卵期は 6～7 月(山口県)で、泥底にくぼみを作って産卵し卵は雄が保護する。北米原産で日本へは 1960 年にシカゴの水族館から寄贈され、これを伊豆半島の一碧湖に移殖した。その後、繁殖したブルーギルを各地に放流しひろがった。県内では佐波川水系島地に民営の養魚場があり、ここで養殖されたことがあり、樫野川には 1982 年に放流された記録がある。分布拡大はオオクチバスのあとを追うように徐々に拡大している。移入種。

- (46) ヒイラギ *Leiognathus nuchalis* (Temmick et Schlegel)

地方名: ダイチョウ、ジンガメ、キンキラ、ギンカツ、ギンビラ、オキアジ、ホオジロ。

口は前下方に突出し、頬に鱗はなく、頭の上部和背びれ前部に暗色斑がある。琉球列島を除く南日本に分布する海産魚であり、県内では感潮域上限付近まで溯上するが、淡水域には侵入しない。県東部河川の河口には多く西部は少ない。在来種。

- (47) キチヌ *Acanthopagrus latus* (Houttuyn)

地方名: キジン、ヒジン。

生時は腹びれと臀びれは鮮黄色を呈し、体長は体高の 2.4 倍。産卵期は 10 月頃で雌雄同体期を経て雌に性転換する。琉球列島を除く南日本に分布する海産魚であるが、瀬戸内海側に流入する河川の河口域で見られる。食用にされるが県内では量的に少ない在来種。

- (48) クロダイ *Acanthopagrus schlegelii* (Bleeker)

地方名: チヌ、チン。

臀びれ軟条数は 8、側線鱗数は 48～57。産卵期は 4～5 月(山口県)で幼期から体長 20cm 位まで雌雄同体で、25cm 位(5 才以上)で雌に分化する。北海道以南から九州南部にかけて分布し、朝鮮半島南部、中国北部沿岸および台湾に分布する海魚であるが、幼期河口に侵入する。塩焼き、煮付けなどにして食用にされる在来種。

- (49) コトヒキ *Terapon jarbua* (Forsskal)

地方名: ヤガタイサキ、コトヒキ。

体側の黒色縦帯は弓型で側線鱗数は 75～100。産卵期は春から夏である。南日本に分布する沿岸魚であるが、河口に侵入する。県内では各河川の河口で見られ、食用にされる在来種。

- (50) シマイサキ *Rhyncopelates oxyrhynchus* (Temminck et Schlegel)

地方名: イサキ、シマイサキ。

体側縦帯は直線で数本あり、側線鱗数は 58～80。産卵期は春から夏である。南日本

に分布する沿岸魚であるが、感潮域に侵入する。県内では各河川の河口に侵入し、食用にされる在来種。

- (51) ドンコ *Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel) (図版Ⅲ, A)

地方名：ゴリ、ボンコツ、コンポチ、ゴッポゴチ、ドンカチ、ドンコツ、エタゴツ、シマドンコ、クロドンコ、バッカ、セタゴ。

左右の腹びれは接近するが癒合はせず、鰓蓋骨に棘はない。産卵期は5月頃（山口県）である。太平洋側は天竜川以西、日本海側は富山県以西の本州、四国および九州に分布し、全川に生息する在来種である。

- (52) マハゼ *Acanthogobius flavimanus* (Temminck et Schlegel)

地方名：ハゼ、ドンコ。

第2背びれは1棘13軟条、臀びれは1棘11～12軟条、縦列鱗数46～48。産卵期は3～4月（山口県）である。北海道から種子島にかけて分布し、河口の汽水域に侵入する。県内では河口はもちろん、港湾（沿岸）などのハゼ釣りは盛んで、食用にされる在来種。

- (53) アシシロハゼ *Acanthogobius lactipes* (Hilgendorf)

地方名：ドンコ、ゴリ。

頭部に鱗がなく、第2背びれは1棘10～11軟条、縦列鱗数36～40。産卵期は5～7月である。北海道から沖縄まで分布し、沿岸魚であるが河口域に侵入する。県内では瀬戸内海側に流入する河口域で見られ、食用にされない在来種。

- (54) マサゴハゼ *Pseudogobius masago* (Tomiya)

汽水域の砂地に生息する小型のハゼ。吻端は円い。宮城県以南から朝鮮半島に分布する。県内で確認された例は少ないが、干潟域に広く生息するものと思われる。

- (55) ヒメハゼ *Favonigobius gymnauchen* (Bleeker)

地方名：ゴリ。

体側に暗色斑が4つあり、尾びれ基底の斑紋は2叉する。産卵期は6～7月（山口県）である。北海道から西表島にかけて分布する沿岸魚であるが、河口域の砂底に侵入する。県内では各河川の河口域で見られ、沿岸の砂浜にも多い。食用にされない在来種。

- (56) アベハゼ *Mugilogobius abei* (Jordan et Snyder) (図版Ⅲ, E)

地方名：ゴリ。

尾びれに2本の縦縞がある。産卵期は6～7月（山口県）である。宮城県・石川県以南の本州、四国および九州に分布し、沿岸や河口域の泥底で見られる。瀬戸内海側の河川では良く見られる。食用にされない在来種。

- (57) ビリンゴ *Gymnogobius castaneus* (O'Shaughnessy)

地方名：マイデ、ゴリ。

口は小さく上顎の後端は瞳孔の前縁下に終わる。産卵期は3月頃（山口県）である。北海道から屋久島にかけて分布する。県内では瀬戸内海側に流入する河川の河口域で良く見られるが、純淡水域にも侵入することがある。食用にされない在来種。

- (58) ウロハゼ *Glossogobius olivaceus* (Temminck et Schlegel)

地方名：マンブイ、ゴリ。

下顎は上顎より前方に突出する。第2背びれ、臀びれ共に1棘9軟条。産卵期は8月頃（山口県）である。新潟県・茨城県以南の本州および九州に分布し、汽水性であ

る。食用にされない在来種。

(59) ゴクラクハゼ *Rhinogobius giurinus* (Rutter)

地方名：ゴリ。

第2背びれは1棘9軟条以下。腹びれは前後に長い楕円形をなす。産卵期は8～9月（山口県）である。秋田県・茨城県以南から南西諸島にかけて分布し、感潮域上限付近から純淡水域に入る。県内では全河川で見られる。食用にしない在来種。

(60) カワヨシノボリ *Rhynogobius flumineus* (Mizuno) (図版Ⅲ, B)

地方名：ゴリ、カワゴリ、ウシゴリ。

尾びれ基底に1個の暗色斑、胸びれ基底に三日月斑があることが多い。胸びれ条数は15～17。産卵期は6～7月である。静岡県・富山県以西の本州、四国および九州に分布し、河川の中流域から上流域に生息する。同属の他種に比べ、大型の卵を産む。食用（佃煮）にされる所もある在来種。

(61) シマヨシノボリ *Rhynogobius* sp. C B

地方名：ゴリ、ヨシノボリ。

眼下にミミズ状線か、眼から放射状線がある。胸びれ基底に複数の半月斑があり、尾びれ基底にカモメ状の斑紋がある。産卵期は5月から8月頃である。青森県から南西諸島にかけて分布し、河川の中流域に生息する。県内各河川の中流域に生息する。仔魚は海へおりる。在来種。

(62) オオヨシノボリ *Rhynogobius* sp. L D (図版Ⅲ, C)

地方名：ゴリ、ヨシノボリ。

尾びれ基底に明瞭で太い暗色横帯があり、胸びれ基底上部に明瞭な円形の暗色斑がある。産卵期は5月から8月頃である。宮城県・青森県以南の本州から九州に分布し、河川の中上流域に生息する。全県的な分布は不明である。仔魚は海へおりる。在来種。

(63) トウヨシノボリ *Rhynogobius* sp. O R

地方名：ゴリ、ヨシノボリ。

生時、雄の尾びれ付近は橙色である。産卵期は5月から8月頃である。北海道から九州にかけて分布し、湖沼陸封または両側回遊性で止水域や下流域で見られる。在来種。

(64) アカオビシマハゼ *Tridentiger trignocephalus* (Gill)

地方名：ゴリ。

体側の縦列鱗数は54以上、胸びれ最上鰭条は遊離し、頭側に太い白点が散在する。北海道から九州にかけて分布し、海水域から汽水域に生息する。食用にされない在来種。

(65) シモフリシマハゼ *Tridentiger bifasciatus* Steindachner

地方名：ゴリ。

縦列鱗数は54以上、胸びれ最上鰭条は遊離せず、頭側に小さい白点が散在する。北海道から九州にかけて分布し、海水域から汽水域に生息する。食用にされない在来種。

(66) チチブ *Tridentiger obscurus* (Temminck et Schlegel)

地方名：ゴリ、チチブ。

体側に4本の暗色縦帯があり、胸びれ基部に三日月形の黄色斑がある。産卵期は6～7月である。青森県から九州にかけて分布し、汽水域から淡水域にかけて生息する。

食用にされない在来種。

- (67) ヌマチチブ *Tridentiger brevispinis* Katsuyama, Arai et Nakamura (図版Ⅲ, D)

地方名：チチブ。ゴリ。

胸鰭最上鰭条は遊離しない。雄の第1背びれは糸状にのびるが糸状部は短い。北海道から九州にかけて分布し、淡水域に生息する。県内ではほとんどの河川で見られ、下流の淡水域に多いが感潮域上限で見られることもある。湖沼陸封されることも多い。食用にされない在来種。

- (68) ヒモハゼ *Eutaeniichthys gilli* Jordan et Snyder

地方名：ゴリ。

吻は上唇を覆い、吻端から尾びれにかけ体側中央部に薄い縦帯がある。青森県から西表島にかけて分布する。河口域の砂底に生息する。食用にしない在来種。

- (69) ウキゴリ *Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf)

地方名：ゴリ、ホイトゴリ、ナナゴリ、フチゴリ、ウキ。

第一背びれ後部に黒点があり、尾びれ基底の黒点は円形。産卵期は3～4月（山口県）である。北海道、本州および九州に分布し、河川の中下流域に生息する。県内では量的には少ないが山陽・山陰の河川中下流域で見られる。仔魚は海におりるが、湖沼に陸封されることもある。食用にされない在来種。

- (70) ミミズハゼ *Luciogobius guttatus* Gill

地方名：ハゼ。

第一背びれはない。腹びれがあり、胸びれ上端の遊離軟条数は1本。北海道から西表島にかけて分布する。県内河川の河口で見られ、礫の下に多い。食用にしない。在来種。

- (71) シロウオ *Leucopsarion petersi* Hilgendorf

地方名：シラウオ、シロウオ。

第一背びれはない。眼は側面にあって大きく、尾びれ後端は直線で、体には鱗はない。身体は半透明。産卵期は2月下旬から3月（山口県）である。北海道から九州にかけて分布し、産卵のため感潮域に溯上する。県内の河川感潮域で見られ、漁獲量は年変動が大きい。美味で食用にされる在来種。

- (72) トビハゼ *Periophthalmus modestus* (Osbeck) (図版Ⅲ, F)

地方名：トビハゼ。

第一背びれは12棘以上、左右の腹びれは癒合して吸盤を形成する。産卵期は5～6月（山口県）である。東京湾から沖縄にかけて分布し、汽水域を好み、河口域の泥底に巣穴を作って生息し、通常は水の中におらず干潟の泥上をほう。河川勾配の緩い瀬戸内海側の河川の河口域で見られる。食用にしない在来種。

- (73) イシガレイ *Kareius bicoloratus* (Basilewsky)

地方名：カレイ、ボテ、カイマン、イシガレイ。

体は楕円形で体には鱗がなく、背面に石状骨質板がならぶ。産卵期は12～1月である。日本の沿岸に広く分布する海産魚であるが、若齢魚は特に河口の砂底を好む。県内では山陽・山陰に流れる河口域で見られる。食用にされる在来種。

- (74) クサフグ *Takifugu niphobles* (Jordan et Snyder)

地方名：フグ、フク、スナフグ、スナブク、カタフグ、ハマブク。

胸びれ後方の黒斑に白い縁取りがない。胸びれは 12～14 軟条。産卵期は 5～6 月（山口県）の新月の晩で、礫の多い海岸で産卵する。青森県から沖縄県まで分布する海魚であるが、幼期に河口に侵入する。県内では全県沿岸に広く分布し、産卵場も数箇所あり、各河川の河口域に侵入する。山口県では食用にする。在来種。

5 保全すべき淡水魚類

山口県版レッドデータブック（山口県、2002）が絶滅危惧ⅠⅠ類に位置づけたスナヤツメが厚東川本流の三地点（地点 1、2、7）から、環境省（1999）が絶滅危惧ⅠⅠ類に、山口県版レッドデータブック（山口県、2002）が絶滅危惧ⅠⅠ類に位置づけたメダカが厚東川本流四地点（地点 1、7～8）、厚東川支流の甲山川、大坪川および古川、および真締川から、環境省（1999）が絶滅危惧ⅠⅠ類に、山口県版レッドデータブック（山口県、2002）も絶滅危惧ⅠⅠ類に位置づけたアカザが厚東川本流地点 1 および支流の甲山川から、環境省（1999）が準絶滅危惧種としたオヤニラミが厚東川本流地点 6 および支流の甲山川から、また、山口県版レッドデータブック（山口県、2002）が絶滅危惧ⅠⅠ類に位置づけたドジョウが厚東川本流 5 地点（地点 3、5～8）および支流の雑佐川、甲山川および大坪川、および沢波川からそれぞれ採集された。

6 まとめ

絶滅の危惧される淡水魚類の種数はあまり多くはない。また、個体数は少ないながら、いわゆる里山的な環境には以前はどこにでもいたドジョウやメダカの確認された地点は少なくない。近年河川改修や堰堤工事などにより、なかなか姿を見なかったスナヤツメも、厚東川本流域で少なからず確認された。このことは、支流を含む厚東川水系が未だ魚類にとって危機的な環境にはないことを示していると考えられる。また、絶滅が危惧されているわけではないが、アブラボテやヤリタナゴなどの在来タナゴ類が、厚東川流域のみならず小規模な都市河川である真締川においても確認された。これら魚類は、淡水産二枚貝を産卵床とする。したがって、これら魚類が生息すると言うことは、二枚貝類が生息していることを示すもので、真締川が都市河川であるにもかかわらず、貝類の生息を保証する環境が保たれていることの証拠である。しかし、宅地造成や新しい都市計画が進む中で、河川改修や家庭排水流入の影響をもっとも受けやすいのもこれらの二枚貝であり、またタナゴ類や河口干潟の小型魚類である。里山的環境に生息するメダカやドジョウも、河川改修や土地改良にともなう水系の改変の影響を直接的に受ける魚類である。この結果にとどまらず、環境と生息魚類の変遷を見守って行く必要があるだろう。

小野湖を中心とした厚東川各地、および真締川と沢波川からは、北米産のオオクチバスとブルーギルが確認された。おそらく、移植されたゲンゴロウブナなどの琵琶湖産魚類とともに混入したか（ブルーギル？）、または釣りマニアなどによる闇放流によって侵入したものと（オオクチバス？）考えられるが、いずれの種も食害や餌をめぐる競争を通して在来の淡水魚類や水生昆虫、はては水鳥に大きな影響をおよぼすことが懸念されている魚類である。これらの魚類についても、在来魚保全の観点から、その繁殖や分布拡大を注意深くモニターし、闇放流をやめさせる手段をこうじていくべきであろう。

7 参考文献

- 青柳兵司 (1957) 日本列島淡水魚類総説. 272pp. 大修館, 東京.
- 荒井克俊 (1997) 魚類の染色体異変とその遺伝資源としての利用. 水産育種, (24): 3-20.
- 道津喜衛 (1979) ミミズハゼ類の生活史研究覚書. 淡水魚 (5): 80-84.
- 江上信雄・山上健次郎・嶋昭紘 (編) (1990) メダカの生物学. 315pp. 東海大学出版会, 東京.
- 藤岡 豊 (1969) 厚東川の魚類. 山口大学教育学部研究論叢, 10: 97-107.
- 藤岡 豊 (1977) 山口県におけるシマドジョウ属の分布. 山口大学教育学部研究論叢, 26: 213-216.
- 藤岡 豊 (1978) 山口県におけるシマドジョウ属について. 淡水魚, (4): 110-114.
- 藤岡 豊 (1991) 山口のさかな. 153pp. 藤岡豊教授退官記念事業会, 山口.
- 藤岡 豊・片山正夫 (1977) 山口県の淡水魚類および瀬戸内海産魚類の追補. 山口大学教育学部研究論叢, 26: 203-211.
- 後藤 晃・塚本勝巳・前川光司 (編) (1994) 川と海を回遊する淡水魚-生活史と進化-. 279pp. 東海大学出版会, 東京.
- 星野和夫・松尾敏生・細谷和海 (1996) 九州におけるアカザの分布. 魚類学雑誌, 43: 105-108.
- 環境庁 (編) (1991) 日本の絶滅のおそれのある野生生物, 脊椎動物編. 340pp. 自然環境研究センター, 東京.
- 環境省 (1999) レッドリスト、汽水淡水魚類.
<http://www.env.go.jp/nature/redlistS/red4.html>
- 片山正夫・藤岡豊 (1971) 山口県の淡水魚類. 山口大学教育学部研究論叢, 21: 73-97.
- 川那部浩哉・水野信彦 (編・監) (1989) 日本の淡水魚. 719pp. 山と溪谷社, 東京.
- Kitagawa, T., M. Watanabe, T. Kobayashi, M. Yoshioka, M. Kashiwagi and T. Okazaki (2001) Two genetically divergent groups in the Japanese spined loach, *Cobitis takatsuensis*, and their phylogenetic relationships among Japanese *Cobitis* inferred from mitochondrial DNA analyses. Zool. Sci., 18: 249-259.
- 児玉伊智郎・友田郁夫・荻山友貴・寺田弘信・安田沙織・金子亜由美・木村由紀代・三木洋美・猶比呂子・猶朋美 (1999a) 山口県内のメダカ (*Oryzias latipes*) とカダヤシ (*Gambusia affinis*) の分布状況. 山口生物, 山口生物学会, 26: 39-44.
- Masuda, Y., T. Ozawa and S. Enami (1989) Genetic differentiation among eight color types of freshwater goby, *Rhinogobius brunneus*, from western Japan. Japan. J. Ichthyol., 36: 30-51.
- 宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦 (1976) 原色日本淡水魚図鑑, 再版. 462pp. 保育社, 大阪.
- Mizuno, N. (1960) Description of a new freshwater goby from Japan. Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, 27: 117-119.
- 水野信彦 (1976) ヨシノボリの研究 3. 四国と九州での 4 型の分布. 生理生態, 17: 373-381.
- 水野信彦 (1981) ヨシノボリ学入門. 淡水魚, (7): 7-13.
- 水野信彦・藤岡豊 (1977) 佐波川水系の魚類. pp. 41-71. 藤岡 豊・高井 徹・水

- 野信彦・久保田善二郎・池田 寛 (編). 佐波川水系の生物総合調査報告書. 山口大学, 山口.
- 水野信彦・後藤晃 (編) (1987) 日本の淡水魚類, その分布, 変異, 種分化をめぐって. 244pp. 東海大学出版会, 東京.
- 水野信彦・上原伸一・牧倫郎 (1979) ヨシノボリの研究 4. 4 型共存河川でのすみわけ. 日本生態学会誌, 29: 137-147.
- 水岡繁登 (1967) ヨシノボリの流れに沿う変異の研究, IV 斑紋型及び胸鰭の鰭条数について. 広島大学教育学部紀要, 第 3 部, (16): 43-52.
- 水岡繁登 (1971) ヨシノボリ *Rhinogobius brunneus* (Temminck et Schlegel) の流れに沿う変異の研究, II 鳥取県・島根県・山口県・九州西岸における体色斑紋型 3 型について. 広島大学教育学部紀要, 第 3 部, (20): 11-17.
- 水岡繁登 (1974) ヨシノボリ *Rhinogobius brunneus* (Temminck et Schlegel) の変異に関する研究, III 山陰・北陸・山陽・五島列島における体色斑紋型 6 型について. 広島大学教育学部紀要, 第 3 部, (23): 31-40.
- 長田芳和・細谷和海 (編) (1997) よみがえれ日本の淡水魚, 日本の希少淡水魚の現状と系統保存. 379pp. 緑書房, 東京.
- 永田洋子・永田昭広・藤岡豊・酒井治己 (1994) 山口県産カワムツ 2 種 (A 型, B 型) の核型分析. 水産大学校研究報告, 43: 17-20.
- 日本魚類学会自然保護委員会 (編) (2002) 川と湖沼の侵略者、ブラックバス. 150 pp. 恒星社厚生閣、東京.
- 日本水産資源保護協会 (編) (1998) 日本の希少な野生生物に関するデータブック (水産庁編). 437pp. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 中坊徹次 (編) (2000) 日本産魚類検索, 全種の同定. 第二版. 1748pp. 東海大学出版会, 東京.
- 中村守純 (1969) 日本のコイ科魚類. 455pp. 資源科学研究所, 東京.
- 中村守純 (1971) 原色淡水魚類検索図鑑, 再版. 262pp. 北隆館, 東京.
- 酒井治己 (1995) 魚類における自然交雑と種分化. 生物科学, 47: 113-123.
- 酒井治己・伊藤大樹・渡辺智久・出射邦明・伊藤行政・松原創・高木基裕・池田至 (1999) 山口県における淡水産ハゼ科魚類の分布. 水産大学校研究報告, 48: 49-56.
- 酒井治己・永田昭広・藤岡豊 (1992) 山口県におけるオイカワ属魚類の分布と雑種の出現. 水産大学校研究報告, 40: 75-82.
- 桜井淳史 (1986) 野外ハンドブック・10. 魚, 淡水編, 7 版. 223pp. 山と溪谷社, 東京.
- Tanaka, S. (1931) On the distribution of fishes in Japanese waters. J. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo, Sec. 4, III, (1): 1-90.
- Tomiyama, I. (1936) Gobiidae of Japan. Japan. J. Zool., 7: 37-112.
- 利重正雄 (1973) 山口県の淡水魚類. 山口県生物教育研究会, 日本生物教育会第 28 回全国大会記念号: 51-59.
- 内田恵太郎 (1939) 朝鮮魚類誌, 第 1 冊. 朝鮮総督府水産試験場報告, (6): 1-458.
- Watanabe, K. (1994) A note on the reproductive ecology of the torrent catfish *Liobagrus reini* (Siluriformes: Amblycipitidae). Japan. J. Ichthyol., 41: 219-221

- Yamazaki, Y. and A. Goto (1996) Genetic differentiation of *Lethenteron reissneri* populations, with reference to the existence of discrete taxonomic entities. Ichthyol. Res., 43: 283-299.
- Yamazaki, Y. and A. Goto (1997) Morphometric and meristic characteristics of two groups of *Lethenteron reissneri*. Ichthyol. Res., 44: 15-25.
- Yamazaki, Y., A. Goto, H.-K. Byon and S.-R. Jeon (1999) Geographical distribution patterns of the two genetically divergent forms of *Lethenteron reissneri* (Pisces Petromyzonidae). Biogeography, 1: 49-56.
- Zhang, Q. and K. Arai (1999) Distribution and reproductive capacity of natural triploid individuals and occurrence of unreduced eggs as a cause of polyploidization in the loach, *Misgurnus anguillicaudatus*. Ichthyol., Res., 46: 153-161.
- Zhang, Q., K. Arai and M. Yamashita (1998) Cytogenetic mechanisms for triploid and haploid egg formation in the triploid loach *Misgurnus anguillicaudatus*. J. Exp. Zool., 281: 608-619.



'02.8.9 厚東川棚井 ウナギ 21.2 cm SL



'02.8.8 厚東川大田川 ムギツク 105.4mmSL



'02.8.8 厚東川大田川 ズナガニゴイ 128.0mmSL



'02.8.9 厚東川棚井ヤリタナゴ 71.1mmSL



'02.8.9 厚東川甲山川アブラボテ 48.3mmSL



'02.8.8 厚東川雑佐川 ドジョウ 82.7mmSL

図版 I. A、ウナギ(21.2 cmSL(体長)); B、ムギツク(10.5 cmSL);
C、ズナガニゴイ(12.8 cmSL); D、ヤリタナゴ(7.1 cmSL);
E、アブラボテ(4.8 cmSL); F、ドジョウ(8.3 cmSL)。全て厚東川産。



'02.8.9 厚東川甲山川 ナマズ 42.5 cm SL



'02.8.9 厚東川甲山川 アカザ 72.0 mm SL



'02.8.9 厚東川甲山川 アユ 90.0 mm SL



'02.8.8 厚東川甲山川 メダカ 23.3 mm SL



'02.8.9 厚東川棚井 スズキ 70.2 mm SL



'02.8.8 厚東川甲山川 オヤニラミ 32.4 mm SL



'02.8.8 厚東川大田川 ブルーギル 55.0 mm SL

図版 II. A、ナマズ (42.5 cm SL); B、アカザ (72.0 cm SL); C、アユ (90.0 cm SL);
D、メダカ (23.3 cm SL); E、スズキ (70.2 cm SL); F、オヤニラミ (32.4 cm SL);
G、ブルーギル (55.0 cm SL)。すべて厚東川産



'02.8.8 厚東川雑佐川 ドンコ 69.4 mmSL



'02.8.27 厚東川甲山川 カワヨシノボリ ♀ 40.8 mmSL



'02.8.27 厚東川甲山川 オオヨシノボリ ♂ 59.2 mmSL



'02.8.8 厚東川大田川 ヌマチチブ 56.1 mmSL



'02.8.10 厚東川際波アベハゼ 30.1 mmSL



'02.8.10 厚東川際波トビハゼ 22.1 mmSL

図版 Ⅲ. A、ドンコ (6.9 cmSL); B、カワヨシノボリ (4.1 cmSL);
C、オオヨシノボリ (5.9 cmSL); D、ヌマチチブ (5.6 cmSL);
E、アベハゼ (3.0 cmSL); F、トビハゼ (2.2 cmSL)。すべて厚東川産